



呪術をかけられた貝貨。貝貨は本来、村のなかで土地の取引をするときに支払われたり、結婚式や葬式の際に親族のあいだでやり取りされたりする



パプアニューギニアの選挙のお守り

市川 哲 (いちかわ てつ)

本館機関研究員

貝貨を肌身離さず

二〇〇七年三月、パプアニューギニアのケビエンという町での現地調査中に、フォンさんという一人の華人女性と知り合った。この国には一九世紀末から植民地労働力として中国人移民が流入した。フォンさんは現地生まれの第三世代であり、この国籍を取得している。彼女はパプアニューギニア各地で飲食店や製材所を経営しており、華人の知人よりもパプアニューギニア人の友人の方が多いとのことであった。二〇〇七年は五年に一度おこなわれるこの国の国会議員選挙の年である。華人ではあるがパプアニューギニア国民であるフォンさんは、この選挙に立候補することにした。フォンさんに出会ったときは、ちょうど立候補の手続きを済ませ、選挙活動を始めたときであった。

ある日、フォンさんの選挙事務所を訪れると、貝殻でできた現地の貨幣(貝貨)を見せてくれた。ここでは現在でも貝製の貨幣が存在する地域がある。ケビエンの周辺では赤い巻貝を加工し、ネックレス状にした貝貨が使用されている。この貝貨を手にとってしげしげと見ていると、フォンさんは、これはあなたにあげることはできない、と言った。そんなに物欲しそうな顔をしていたのかな、と思ったが、フォンさんがこう言うのには、別の理由

があった。

じつはこの貝貨には呪術がかけてあり、彼女はお守りとしてもち歩いているのだ。このお守りは、選挙期間中に受けるかもしれない被害―たとえばライバルの候補者が彼女にかけられる呪術―を防ぐためのものであった。フォンさんやその支援者に言わせると、対立する候補者から呪術をかけられると、病気になるったり、事故を起こしたりするそうである。それを防ぐために、自分たちも呪術をかけたお守りをもち歩く、とのことであった。

フォンさんがこの貝貨を手に入れた経緯はこうである。選挙活動が始まる数カ月前のある日、フォンさんはジュリアス氏という男と出会って話す夢を見た。同じ日に、ジュリアス氏もフォンさんと話す夢を見た。数日後、外出先で偶然出会った二人は、同じ日に同じ夢を見ていたことを知り驚いたそうである。さらに、このジュリアス氏は地元で有名な呪術師だった。選挙出馬を目前に控えていたフォンさんはジュリアス氏に、ライバルの候補者からかけられるかもしれない呪術から守ってくれるように頼んだ。ジュリアス氏は彼女の依頼を受け、自分の出身村で作った貝貨に呪術をかけ、彼女に渡したのである。選挙活動のために町を離れ、村々を訪れて演説する際には、常にこのお守りを肌身離さずもち歩いている、とフォンさんは説明してくれた。

ダルマも風変わり!?

この話を聞いているとき、ふと日本の選挙のことを思い出した。日本でも選挙の際に願掛けをするのは一般的であろう。お守りをもち歩く立候補者もいるかもしれない。ダルマに目を入れるのはよく見られる風習となってきた。しかし、対立する候補者から呪術をかけられることを恐れ、お守りをもち歩くという人はまずいないだろう。その意味で、日本人から見れば、フォンさんのお守りはかなり風変わりなものである。だが逆に、パプアニューギニアで選挙活動をする人びとにとっては、何故日本人は選挙のときにダルマに目を入れてきたのか、そして何故それが当選するための願掛けになるのかを理解するのは難しいに違いない。呪術的なものが風変わりに見えるのはお互いさまだといえるだろう。

二〇〇八年三月、一年ぶりにパプアニューギニアを訪問した際に再びフォンさんと会うことができた。彼女は選挙区で第三位の得票数をえたが、結局、落選してしまったそうである。国会議員になることはできなかったが、次は数年後のケビエン市長選挙に立候補するとのことであった。結果はどうあれ、彼女は選挙中に、特に危険にさらされたわけでもなかったようだ。次回の市長選挙でも、彼女は同じように呪術をかけたお守りをもち歩き、選挙活動をするにちがいない。